中村俊定文庫
文庫 18
387
2

寶曆十一

夜引集

地

宮城県立図書館

歌仙

夢太

鶯北九つ緒てを川苔の孔
芦舎さるる梅乃ま鄰桃鏡
祢ゆるさるる嶌へ小縁の雲雨て　仝
枝り等屐乃佐も中はし　太
横ふふ月待芦乃出悦　仝
風く林文秋の夕くま　鏡

中村俊定文庫

相宿のさろ強さハ角力取　太
而与とり琵琶の袋ぬく　鏡
喰兼ぬ麦田ハ又麦とけ　太
無常乃煙ほんてつも形　鏡
もつれ昊見ゑ古い窓ふろ　太
鼾乃中り変はくく　鏡
傷ゑとり月も吹ゑ温泉ぬ旨ひ　太
うけあるのロを絶庖丁　鏡

廣津の扇やきてゑぬ襟巻て　太
雲乃件のと度紋ほまる　鏡
寺くの花又一町かく孔雀　太
なるふくゑの丈もふゑ日　鏡
雲食ぬ菜薩もさめ山帰来　仝
もれ〳〵人を拾ちすく　太
森みゑハ指ぬ蛍尼の落淺茨　鏡
縄帆の茅まさ〳〵とこそ　太

近頃古渡りの名物歌舞伎
師走も既に後ろ姿の時　鏡
能因の翠黛として垂れる名　太
留守居ふよい蒲団一まい　鏡
六部を市と喧嘩の掛合　太
馬子小附乃鎗ヶ出てゆく　鏡
いく筋くれた月を足景て元あるな　太
南帰紫胡の高乃ふるさと

ナウ
走る雲の芳地を夢よ立かな　鏡
賽乃（カリマウシ）猪を背ゆ　太
そそふあれを枕よ乱れ　仝
桶と曲突と先へ飛うつる　鏡
ゆく水のみちよんぐ花筏　仝
稲妻ゆくてし山吹　執筆

春之部

去日琴を図て

風蕩る琴の葉あらの古木梅　柳肘

や僧が経乃志るべや梅が花　東仙

蝶くや女の影る影ゆら　這平

羽織るも風八合や汐干狩　雪圃

夏へ越す藪入もあり蕨もち　慎車

菜が葉の玉川見るり帰性　旅人

脂立も汐の満干や雛まつり　芦一

泥盤ゆる猿て洗ふ子の顔　鯉半

大空へおよぐ紀伊ゆる雲雀の風　桃之

馬下りて漂くるる蒙古　兼盛

菜畠を道の物ゆや梅ゆ香ふ　拾葉

春柳の糸やゆるく二月　如風

梅咲や吹色を香の裏行すて　鷺九

梅香やうかとのゆるる生大根　持衣

蕪文

三日月の人の知るや梅の花　底花
見ぬ人を思ふや滝の月　萩路
遠のけて鹿のうさく柳かな　敬雨
松香石色喰て狂白し　釈青布
寄涼の雨ぬれやむ夕暮　竹曙
一柄抄筋ふてやん猫の恋　南羅
雨も絶てを餅の乳立柳の南　吐月
風も又うとうぬるいのわり　風舟

夢見草　四

夢見草神なるうき東やうき　嵐亭
うき世の夢見草細雪も雛の月あかり　蓼太
さらさらと風の吹くと雲雀哉　桃鏡
丈なとうき者や山さくら　駿の燕波
雪の松乃田毎をひかる蛙哉　春字
江の夕べて新とい見ぬ柳哉　呂風
さくら花や雲さくら添ぬ胡蝶哉　栗津文素
氷ともゝ窓の明るう梅の花　可風

山吹やかとうもれ赤ちら　駿河　梅冨

人もる時ひとり咲くふ　梅これ　岳逸

岩ちりまきくとや涅槃像　長崎　八亀

蟬くや春の綿をまそうり　紀來

もの日も香り体や梅兼　出羽　風州

ある時を思ひ出さや山さくら　鸞窓

一思案してあちらむく蛙こふ　摂州　有隣

枝をまく神〻寒や梅乃花　伊勢　麦浪

若竹や安達ヶ原も麻の角　温故

伽羅の香を清士は焚火乱雛祭　如之

ちれて俺く人をあるとも雨　何聲

いろく咲る乃出て来る柳これ　二日坊

りまや根のふい雲よ生てうり　越中　麻父

芙蓉つむもとやもれ山おろし　京　山只

人象のさうれ蔵こふ　桃鏡

歌仙

夏の月水よりふかくてゆるる梁　桃鏡
舟ちらす扇之味線　吐月
茶さしに一番鍋よりお織まて　蓼太
さあらはたたぐるかとある　這平
老山を師走の雪も捨ふまた　機石
名菜畠ぬ城おろし年ぬ戸　投貢

芝居うつ金と撰まの箱丈本　萬古
とう面相も古狸ふ里　五全
女ふい財主文関の朝あし　風府
むふ後の巾もまて　鏡
ぬぐまも焙加減ぬ成ち　月
枝かくと吳乃志ふ　古
ちふまあ敷事公の法黄是袋　貢
孫のまひを余而よ織　友　太

蕎いろく短冊に三寸陶　全

かつら男はひとり吹ける　石

花ちらすうつて舵はる隅川　平

種うす木の間乃さくら大名　月

神引て第ふ温泉は孫さくら　鏡

山もちくの春は焼かそく　太

迎辯乃付き軍のそれる　石

老川めてきけを吃ても飛し　平

猫抱て寺川を舅の孔走ちり　古

陰ちこそふふくもゆる凌青　貢

すしまを稽ふ渡ふ軌ちふ　村

怖く梵論ち而ちて見る　全

囲ちて寺ちちくと侍常　月

白ち吟てと胡新の者　鏡

ちの乃発を者て啼四十ち　村

鉢約時を在禅友達　古

ナウ

市籬ちまつさ乱の切山椒　石
祇形町乃雨のつまくく　全
燒ち三つ四つ掩ひ掩おろす　貢
とくしも死れ白髮いとく　平
兼もそ花かさくよ咲て鶯合　月
朱ちかも市ふ羽衣篇も開花　村

夏之部

いさ庭の山路書きんなとき寺　完子
牧もらや源氏よあくて行ひ巻　楚水
麦飯の客ふ保さる茶碗の乱　物雲
帷子やひと月を頼丈衣食住　信夫
卯の花や西ふも歌の解て切　蟻林
二三度ち知を明よちり時雨　寒蓼
住て実清ふの紅ひ松ち迄　眠我

おもひねたゆゑ候うかきけさく　蓼旦
橋よりをりてうまあるあやめぶ　牛東
淀川やや押もて笠り一枝紙　柳波
夕影やあるを笠も峯の雲　嵐腹
胡瓜の帆うるる宇や雲の峯　野菊
挨拶乃牛よ皆遠ふ牡丹ぶ　枝貢
驚ひとりおりく涼む田永ふ　有止
二日月を見るも拾ふ糸ふ邪　帰巷

思風
見る人もかりんこう
山水
枝ままにて弟ふ
馬雲
を立ても宇や仏生会
荊雨
稲妻もまぐト鳴てを田うれ
求光
誘ひ人をさそひよりや衣かん　釈
蓼太
惟光を踏へくもれ花柚の風
班象
一節を出清宇ふ合清水ぶ
寸長
千金を貴ぶ秋ありてかときす

淋しきまれ猿ふるさとかんこ鳥　泉鳴
ちるを又あるあるじやわれ松魚　桃鏡
ゆゑ乙女やの男の笠ぬ月ひとり　信州東漣
うつくしきめをゆてもしもあり蝿を泥　渡柳
軒をうらやに利ゐ（ほ以て引）　上総芦風
山ともうう川と茅町やの部ゐ　亀鏡
茅蜩てをもをあるかきれる　御風
新くもる茅ものの月やとて休　羽人

雪も又待ちあるやの花明る　眉山
夕立北里ふるゐ青田ゐ　臺吹
下流もさゝゐ川あり若　楓　上総　山奴
女よい待をめをれ新　駿河　鐘山
くき竹や月ゐ浪ゐゐ流ゐ　金兎
一日乃夏　屋蜩て下とゐ　麻竹
蜩大やゐ湯士の蜩ゐ新　茶来
下とゐきゐ茨を梅よ白ふ　如竹

垂て涼しひとしほある琴の仇　雪葉
涼しさやまぶ六月のきりぎす　雪支
松の風ふきかくれてまぶ清水哉　波元
夏ふさぶ山吉野に奥ふ谷乃音　甲州　路雪
すゝしさやかきの下蔭を作筵　陸奥　等鯉
たゝきぶきの帷子の洗ふこゝろ　京　文下
柳うゑ茶や菖乃ゝ肥川　花沙
門乃水かゝてもぶ下りぶ　歩月

涼て夏しらぬ書あいつこゝ乃ゝぶきぶ　吟海　鉄叟
むし〳〵雨を見代ぶて仇乃夏　蝶羅
おのゝ水を見せてぶ〳〵ぶ菖ぶ　尾城　木兒
菊ぶて花の影ある牡丹哉　桃鏡

歌仙

[illegible]容と亭主と白菊と　蓼太

新古頃　南山の月　桃鏡

[illegible]修の鞋の一二を踊せく　風対

[illegible]こ雨ふるとて我名高く　鼠腹

苔柄のむ[illegible]ふ[illegible]麻羽織　吐月

[illegible]て[illegible]裏北川く　太

ウ

麦仮[illegible]俗の[illegible]物たらん　鏡

[illegible]古[illegible]のまぐ[illegible]合極　対

雨音と傘谷乃[illegible]　腹

改[illegible]俗[illegible]高陽[illegible]　月

年を角[illegible]老[illegible]北あちこち　太

[illegible]む[illegible]漢も　呼も[illegible]　鏡

[illegible]こ一[illegible]の[illegible]月　対

[illegible]乃[illegible]　腹

紙袋紙を下てさるゝ村もち　月
ゝゝゝ大豪根屋のもりゝ（背　太
聾の方ゝゝ雑子ゝ言　調子　鏡
之月尽も掛ゆる　次　府
板塀乃木具ゝ陰ゝ有ゝ豪　腹
五文の施も後乃月尽　月
手鞠ゝたゝぬ小指も見ぬき　太
新ゝ乃ゝゝと又小町之　鏡

年の暮降ゝ暮ゝ一ゝ　府
文ゝ草屋の釜乃煙風　腹
後ゝぬゝゝゝゝゝゝゝ　月
螺吹新の刀ゝゝぬゝ　太
浦山乃あまも帰帆ゝ　鏡
西ゝゝ白ゝ月の明ゝ　腹
ゝゝ意ゝ釣ゝゝふしの焼草　府
ゝゝ聲ゝぬ餐ゝ種ゝ　鏡

清水うつす苗代乃小笠原　太
ものとをふ辻堂の夕暮　月
鶏をわきまえて五更を知る　腹
百里ふる雨に矢立一本　利
ちる花もわかれの苔に五十鈴川　太
ものうねあるやせ蝶の柏堂　鏡

炑之部

千之

下茎へ風を流しつゝ芭蕉の葉
尺の人せを我影法師玉象　吏流
我もうつゝ口ずさむ河梨故生　如雷
涼風の市ゝとあつう天の川　冠中
秋もまや茅葺の田の家　友鴉
雲帆うけて切る岸辺の月　白翅
鳥羽の文字てもされぬ月　氷鏡

是ひなも暑り涌る虫の声　機石

河萱ふる人も麻入て秋寒し　花明

ひくらしや入日乃残る峰の松　朧亟

大川烟や籏立山の雲出より　雨磧

あらくと絹市立や今朝の秋　史軺

葉乃香や梅も及ぬところまて　梅溪

秋あらしのもきり捨る帽子かな　栢子

暑れしも下手にあてりふ残りけれ　桃弓

山寺りそれは見せてかしこ　傘車

蜩まて鳴く淋し博士か妻　燕角

比辺も暮らし細し簾の声　笆夕

うら枯や枯ぬそれは露ならう　雪川

宿りしも旅立仰く星むかし　花傘

大川汐や月も押来る何百里　愚口

破芭蕉残りてさむし瓢の風　橋青

名月や何く走る海乃うへ　鳥酔

宿のうてゝ麻苧走るやゝこの秋　蓼太

仲秋も過て雨もてるせぬ秋かな

雨晴て月も破るゝ芭蕉ふか　桃鏡

雲ゝ菊やゝ雲よ新いて根ふし茶　六渡（嵐）

秋初義経出る茶山ふか　駿河　残馬

ゆく燈やゝ遠乃ゝ秋いきゝ　大賊

切風ゝ戻る風ゝ花すゝき　塘仙

きい茶ふの京ゝ義ふ秋ふ　瓦子

秋平ゝ香々奢ゝ菊の花　雪随

菊て切株ゝまい秋ゝ角力　白鵜

茶のゝはゝ月ゝ香ある菊花　くに

ゝ月ゝや村ゝ豆腐の出る時　子来

走ゝ菊やゝ新さゝゝ鶏　おか（きか）　素園

戸を立ゝ三ゝ月ゝの秋ふ　尾張　也有

新茶ゝ人やゝ寂たゝ捨ん　桃鏡

歌仙

柿さくら　裏たれて降る小雨　桃鏡
ち橋うたゝぬ冬の夕照　蓼太
市原の四角ふゝ御を載きて　吐月
まゝ仕れて解けかき　鏡
菊の日を俄雲の風乃月　太
鴨ゆ尾越乃尾ほ足　月

ウ

貧窮乃秋として謁と寂ゝ　鏡
月清名球り茅屋もせる　太
風ひと月毎ゝ敷まるあれと　月
風名のゆゝ宮田植之　鏡
紫陽花乃沿黄干て胡日新　太
きあと駕英て笠をわもゝ　月
家を尾ゝ見せゝと賜る茶　鏡
ゝ古　麦茶うゝ浮　太

七夕のむかしなれさ雨もはし　月
迎を待れ初後松の月　鏡
花もやゝ蕚の能乃おう後　月
女六文字　木の芽てんく　鏡
ちうてと拔章八尺ぬ栖袋　太
家越車乃世を乾る川　月
方丈の記乃筆立て小さうつき　鏡
如為元とまゞ思ふこりや　太

章取をむさと女を取うせん　月
史紙う思ふ雲乃金扇　鏡
おろす時風を唐帆はかこ雪　太
笈を深草うき岩けし　月
佛の幸百卿ても屋ふれて　鏡
疱瘡神とゝ柳うふこく　太
侍育の十六枚ぬて涼しさも　月
御乃乃紙をうけく見送　太

ナウ

濃椿の法搭新ふるまふ　鏡

暖籠ふくへ中をすれく　太

高雲の時ふるまふ　月

裸て起ふく日和ふて来る　鏡

紅もかもの如朝のおさる　太

此ふしの代乃弥生なる　月

冬之部

鶯鳴や旭乃ゆる地蔵ふ　金沙

ふるゝ香をけ方ふ鶯ん宝の梅　蓼把

荒海の夢外ふ雪ふ生ふ春ふ　自来

燥ふ中や遠い陽へ高ふ客　鬼守

麓ふふ思へ春ふ紙衣ふ　卯雲

樊時ふ蒲原も佛や春ふ雪　萬古

ふふ〳〵絵ん歌ふふ仏ふ　九水

風雅や都の町乃投入巾　三楚
一枝ほく軒ゟ淀ある氷柱ぶ　芳樹
油屋のれてもひらり枯柳　翠羽
水仙や思ひんとあるる妓王妓女　五全
客ゟりけれ鳥よ見てゟり納豆汁　沾我
草庵袋の曠ゟ庵くも枯野ぶ　故延
ゟ鶯や石へ蔦ても力艸　溪里
稚ゟなり茄子を一つ時百ゟ　籟柯

是ゟ〳〵月を入ゟり初史桶　止啓
泥ひとり口もれて寒ふ氷のな　調布
網破ゟ舟ゟおもふよ寒風ゟ　蓼左
鶯鈴ぶさやたゟまる氷の風　伯兎
仏名や白ゟよを見わた人の息　心祇
枯ゟも簾原寒て鶯枯野ぶ　渡道
吹ゟ〳〵ゟ野を見ゟ寒ぶ　白牛
吹ゟひゟ舟ゟたゟ寒ぶ　秋仇

永ふと訪いてい又雪見のふ　桃鏡
桂の影ふも思ふ　てや初時雨（出羽）　吾竹
指小木ふ枝かしまみてさふ（下結）　眠江
恋嘆ふ秋を極乗や者念俳　唯我
木ふふしの咲すゆめふふ庵の庵（相州）　変由
鉢菜黄ふ日とい木は蕪の時白ふ（上州）　東扇
碁石ふも焙炉掛ふ冬籠（上結）　蚊牙
庭ひとり合歓ふ秋ふ木は蕪　花上

水ふ氷ふ呼深ふ汐人ふ　砂川
麦蒔の空やかれふ蕪ふ祈　山柴
蕪つふ朝日夕日や冬の梅（駿河）　乙児
氷ふふ流ふ者ふ月秋ふ　千婦
色入て降ふ石山の初しぐれ　曙山
時ふふ蕪かくふ生麦ふ　百果
留守ふ人を尋て器ふふ　琴雨
弩拳や悟ふの水をふ　都雁

出めせん乃思葉（戻る青天井　斯山
木くしや町ゝ部よ枯てゝ　大耳
ゝ川東ゝやゝ川ゝの橋を渡りめ　鳴海　和菊
初雪ゝ降ゝ橋ゝ和ゝ入ゝ乃海　熱田　馬明
五十年人よりまれて帝京ゝ　尾張　南空
淨破理の永ゝ法ゝ師ゝ之ゝ　蓼太
髮おしむ兒ひとりあ秋年ゝ暮　桃鏡

江戸日本橋通二丁目
戸倉書店